

古墳時代日向の王と生目古墳群

宮崎大学教育文化学部
柳沢 一男

1 古墳時代と前方後円墳

おおそ3世紀後葉から7世紀にいたる300年あまりのあいだ、南西諸島と東北地方北部以北を除く日本の各地に、大小の盛り土でつくられた墳丘墓＝古墳がつけられた。そのなかでも、後円部と呼ぶ円丘部と前方部と呼ぶ台形部を組み合わせた前方後円墳は日本独自の形態で、総じて規模が大きく、地域を統括した首長の墓と考えられている(図1)。このほかに円墳や方墳などの墳丘のあるもののほか、基本的に墳丘をつくらない横穴墓や地下式横穴墓などがある。古墳の形と規模は、埋葬される人々の生前の社会的・政治的地位によって決められたらしい(図2)。

前方後円墳はひとつの古墳群の中に複数築造される場合もあるし、あるいはある一定の地域の各所に分散的につくられる場合もあるが、築造年代におおむね一世代(約20~25年)程度の間をおくことが多く、世代を次いで累代的につくられた。こうした前方後円墳や大型古墳からなる古墳の系列を首長墳(墓)系譜と呼んでいる。研究を進める上で前方後円墳や首長墳系譜を重視する理由のひとつは、その規模や消長を通して地域勢力の強弱や変動(衰退や交代など)を解明できることにある。そしてその推移のパターンを複数の地域間や中央との比較研究によって、地域内・地域間の政治過程、地方と中央との関係などを推し量ることができるからにほかならない。

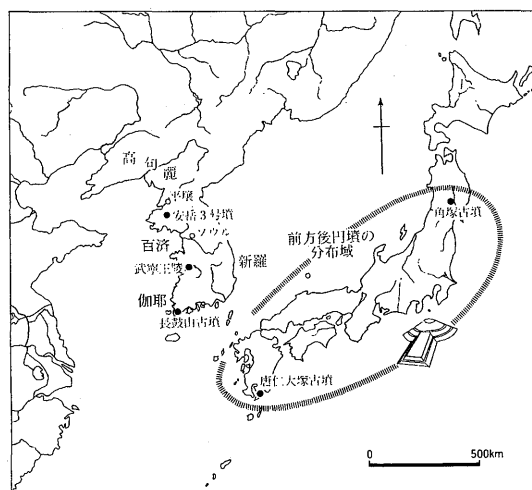


図1. 前方後円墳の分布
(新納泉1989「王と王の交渉」『古代史復元6』)

2 見直し進む南九州の古墳時代

南九州は前方後円墳を含めた高塚古墳の分布する列島の最南端であり、従来の認識で言えば僻遠の地ということになる。しかし中央から離れた列島の端部は、逆に言えば異世界と接し、異なった文化に出会う交流の場である。これまで南と北の地域は、中央から僻遠の地と言うだけで、文化の遅れや政治社会形成の停滞性が主張されたこともある。

しかし近年、進展しつつある各種の考古学的調査によれば、東北地方では古墳の出現が畿内周辺地域とさほど変わらないことが明らかになっている。そして南九州でも、後述するようにさほど遅れない可能性がきわめて高い。このことは、考古資料という歴史的事実の側から従来の通説や考え方を根本から見直す必要が要請されている。

鹿児島・宮崎地域の南九州には、北は延岡市周辺から南は串間市、さらに鹿児島県の志布志湾沿

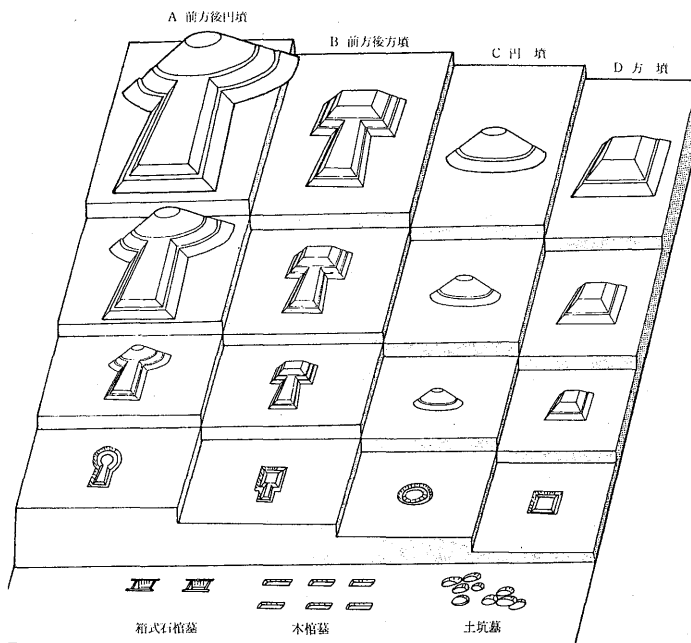


図2. 古墳の階層性
(都出比呂志1989「古墳が造られた時代」『古代史復元』6)

岸域にいたるまで多くの高塚古墳が分布し、そのうちに約200基の前方後円墳が含まれる。前方後円墳は列島全域で約4900基、九州全体で約560基(1992年段階)、南九州の前方後円墳の数は九州の他の地域と比較して何ら遜色がないどころか、女狭穂塚古墳をはじめ、九州の大型古墳上位10基のうち7基がこの地域につくられた意味は重要である(表1)。

これまで南九州の古墳時代、とくに墓制については、西都市西都原古墳群を中心に語られることが一般的であった。たしかに膨大な数の古墳が集中する西都原古墳群は、列島有数の規模であることに相違

ない。しかし西都原以外にも多くの古墳や古墳群がある。小丸川流域の川南・持田古墳群や、一ツ瀬川流域の祇園原・山ノ坊・石船などの古墳群、大淀川流域の生目・下北方古墳群、そして鹿児島県志布志湾沿岸の塚崎・唐仁古墳群などは、見逃すことができない重要な古墳や古墳群である。これらの古墳群が従来やや軽視されがちだったのは、古墳の内容がよくわからなかったこともあるけれども、相互にどのように関連するのか、という視点からのアプローチが弱かったように思われる。

近年「宮崎県史」の刊行に際して県内主要古墳群の精密な墳丘測量図が作成され、いくつかの自治体でも精力的に前方後円墳の測量調査や重要な古墳の調査が始まり、これまでのイメージを大きく塗り替える発見も少なくない。とくに墳丘測量図の整備は、古墳年代の推定だけでなく、墳丘規模や墳形の比較研究によって首長墳や首長墳系譜を営んだ地域首長勢力相互の研究に重要な資料を提供するものである。こうした地道な作業の積み重ねによって、豊かな宮崎・南九州の古代・古墳時代像が生み出されるに違いない。

なかでも近年クローズアップされはじめた宮崎市生目古墳群は、これまでの南九州のイメージを一変させただけでなく、列島古墳時代像の一部も書き換えられるべき内容をもつ。

表1. 九州の大型古墳上位10基

古墳名	規模	時期	墳形
1. 宮崎・女狭穂塚	178m	5前	仲津山類型
2. 宮崎・男狭穂塚	160m	5前	帆立貝形
3. 宮崎・生目3号	143m	4後	渋谷向山類型
4. 鹿児島・唐仁大塚	140m	5初	柄鏡形c類型
5. 鹿児島・横瀬大塚	140m	5後	大仙類型
6. 福岡・岩戸山	138m	6前	
7. 宮崎・生目1号	130m	3末	箸墓類型
8. 宮崎・持田1号	120m	4末	柄鏡形b類型
9. 大分・小熊山	118m	4前	行燈山類型
10. 大分・亀塚	118m	4末	佐紀陵山類型

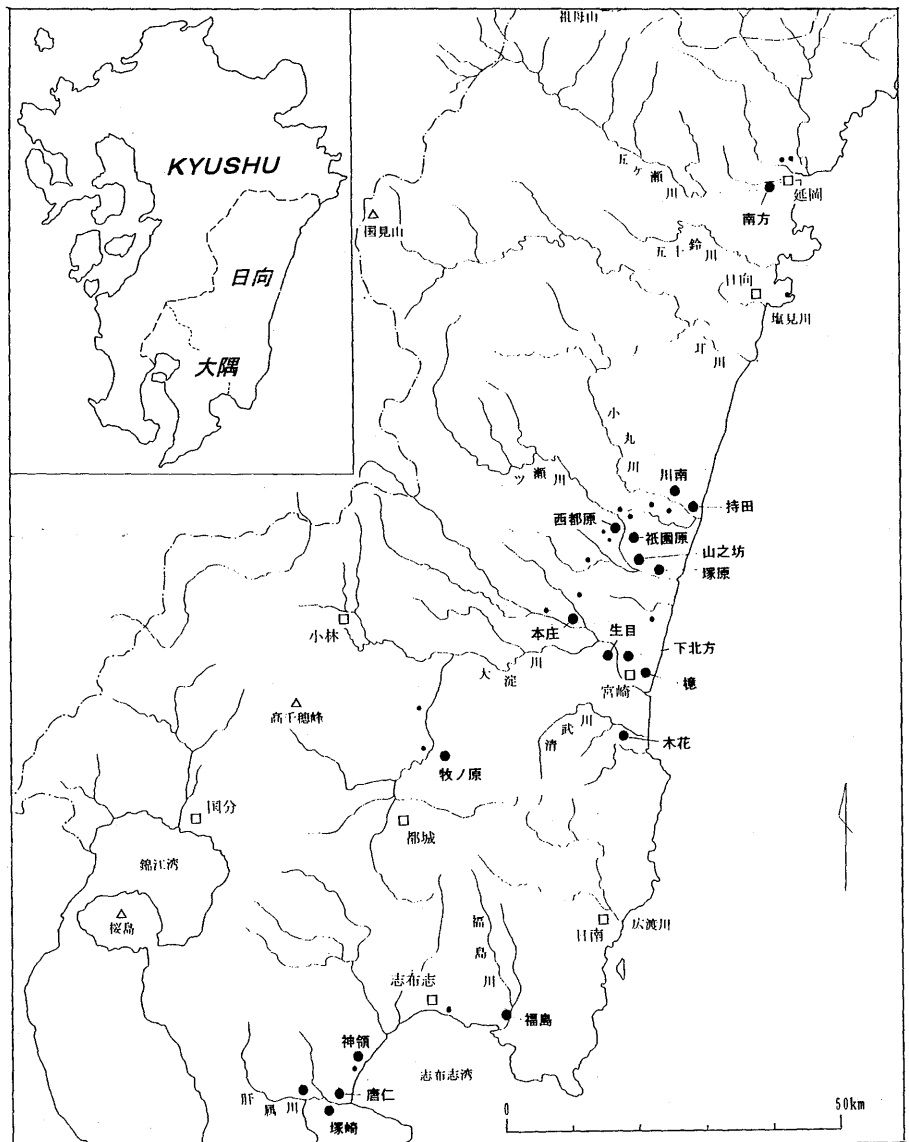


図3. 南九州東半部の主要古墳と古墳群

3 生目古墳群の大型前方後円墳

宮崎市生目古墳群は、現河口から9 kmほどさかのぼった大淀川右岸の標高20m前後のシラス台地上に分布している。前方後円墳7基、大小の15基の円墳のほか、近年の確認調査によって円形周溝墓や土壙墓、木棺墓、地下式横穴墓などが発見され、古墳時代前期から中期ないし後期にわたって墓地として営まれたことが判明しつつある。

このなかでとくに注目されるが1・3・22号墳の3基の大型前方後円墳である。120m級ないしそれ以上の墳丘規模を有する。従来、中期の5世紀代の古墳と推測されていたが、墳形からみて、古墳時代前期の3～4世紀代にさかのぼることは間違いない。

なぜ墳丘の形態から前方後円墳の年代が推定できるか、簡単に説明しておきたい。

前方後円墳の墳形は多様だけれども測量図の比較研究によって、墳形・規模が瓜二つの古墳や、規模に違いがあっても平面形が相似形の古墳があることが判明している。このことは前方後円墳の墳形が場当たりの思いつきで決められたのではなく、綿密な設計企画があったことを示す。最近の墳形研究は、畿内の巨大古墳（＝大王墳）の墳形は前段階の墳形をベースに新たな墳形に変化し、その墳形がある一定期間に列島全域に拡散すること、それが新たな墳形創出のたびに繰り返されたこと、などを明らかにしている。相似墳の場合、モデルとなる墳形は大王墳級の巨大古墳の場合と、地方の大型古墳の場合がある。

前者の場合、大王墳の墳形が決定・築造が開始されたのち、王権直属の造墓集団の手を介して地方首長の前方後円墳に設計図が配布され築造された可能性が高い。埴輪・埋葬施設・副葬品の更新も同様で、古墳時代の政治構造と王権と地方首長の関係を明示している。

こうした研究成果に学びながら、生目の前方後円墳を観察すると次のようになる。

①1号墳

戦後になって墳丘の裾が削られるなどの変形が著しく、かつ精度の高い測量図がないため不安が残るが、昭和10年代に作成された測量図で検討すると、前方部

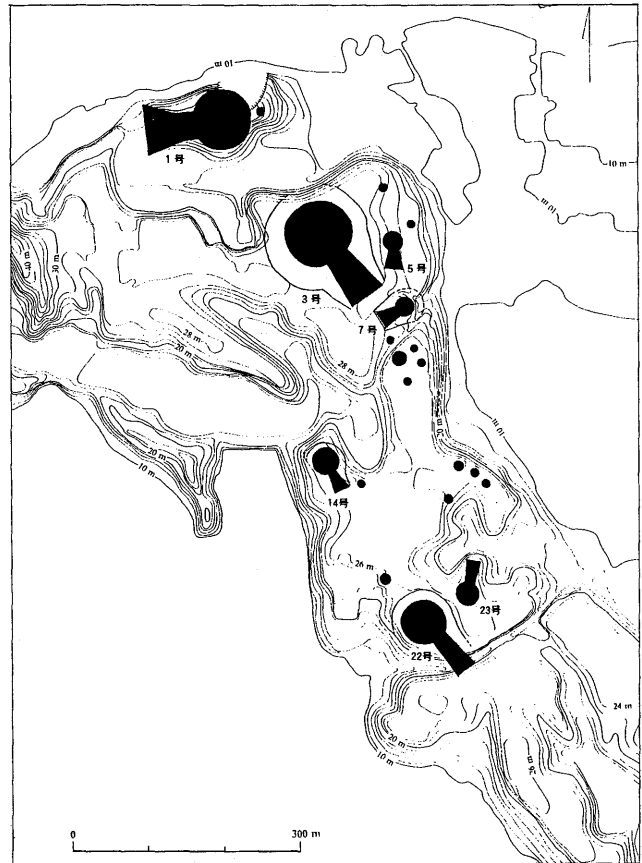


図4. 宮崎市生目古墳群分布図(1:10000)

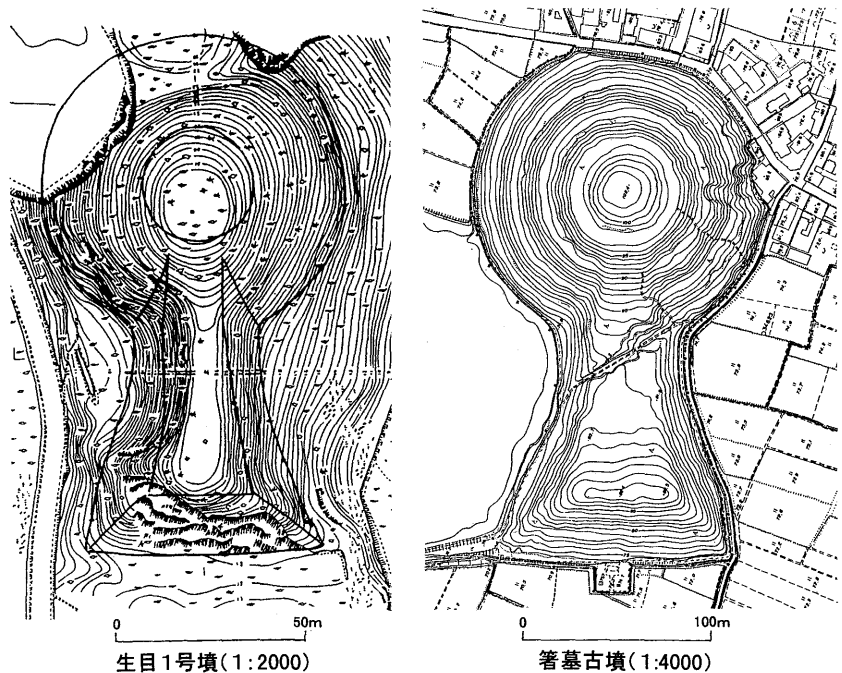


図5. 生目1号墳と箸墓古墳

前面に空堀がめぐり（現在は埋められている）、前方部墳端線が前端に向かってカーブしながら大きく開くことを読みとることができる。後円部は台地最高所に構築され、平面形が偏平楕円の変則形である。墳長約136m。後円部径86×70m、前方部幅約70m、長約65m。

この墳丘測量図に、実長比で1/2に縮小した奈良県箸墓古墳の墳端と頂部輪郭線（左右反転したもの）を重ねると、前方部の墳端線と頂部端の位置がほとんど重なることが分かる。後円部は最大径が等しいけれども、頂点は著しく内側に入り込んでいる。後円部がこのような変則形になった理由は分からないが、前方部平面形と後円部直径の相似関係からみて、1号墳の墳形は基本的に箸墓古墳の1/2に設計された相似墳であった可能性が高い。しかしながら、墳丘縦断方向の立面形は箸墓古墳との間に違いが大きく、むしろ別系統の奈良県外山茶臼山古墳に近い。どのような技術的交流のもとにこのような墳形が生じたのか、今後の検討課題である（図5）。

箸墓古墳は墳長280m、細いくびれ部から先端に向かって緩くカーブする撥形前方部が特徴である。現在、すべての研究者が列島最古の巨大墳と認める古墳であることに相違ない。しかし築造年代については意見が分かれるが、遅くとも3世紀後葉と想定したい。相似墳の1号墳の年代がどこまでさかのぼるか不明だが、箸墓の次の巨大墳＝奈良県西殿塚古墳が築造を始めるまでの間につくられたことは認められてよいであろう。

②3号墳（図6）

墳長143m、古墳時代前期の前方後円墳としては九州最大規模である。前方部隅角で収束する馬蹄形周堀をめぐらせる。後円部の頂部に高さ3mに達する大きな円形壇を設ける。しかし昨年度の調査で、円形壇の周囲から中世に掘削した空堀を掘っていることが判明し、円形壇が本来の構造物であったか疑問が生じた。しかし類似した円形壇が22号墳にもあるから、全面的に否定すべきではないだろう。本来あった円形壇を取り囲むように空堀がめぐらされた可能性もある。なお前方部前面の調査では、段築が2段と墳端に敷石を行った低い基壇状施設がめぐることとも判明した。

この古墳の墳形について、かつて奈良県行燈山古墳（現崇神陵）の3/5の相似墳と想定したことがある。しかしその後に行った測量図を基に再検討した結果、細部に多少の差があるが、平面・立面形が奈良県渋谷向山古墳（現景行陵）のほぼ1/2に相似墳であること明らかとなった。渋谷向山は墳長約280m、行燈山に後続し柳本古墳群最後の巨大墳で4世紀中～後葉の築造である。

③22号墳（図7）

墳長117mの典型的な柄鏡形類型の墳形である。前方部が道路によって切断されているが前端部がかろうじて残る。後円部に対して前方部が細長くかつ低い形状が特徴的である。こうした墳形の前方後円墳に対して、地元の研究者はとくに「柄鏡式」と呼び慣わしており、その経緯を尊重して柄鏡形類型と呼んでいる。後円部直径60m、同高4.6m、前方部幅26m、長56m、同高4.6m。この墳形の特徴を要約すると、①前方部の平面形が細長く、前方部頂が水平か先端がやや高まる程度、②前方部長が墳長の1/2程度で、他類型の前方後円墳と比べて著しく長い、③前方部の高さは、後



図6. 生目3号墳(1:2000)
(太い輪郭線は1:4000の渋谷向山古墳の墳端と頂面)

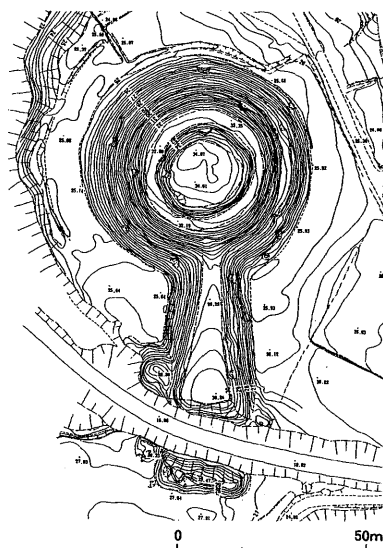


図7. 生目22号墳(1:2000)

円部高の1/2程度から1/4程度のものであるが、低いものほど築造年代が新しくなる傾向がある。22号墳では、平成8年に行われた小範囲の確認調査の際に前方部墳端から壺型埴輪の破片が発見されている。もともと墳丘頂部に立て並べられていたものであろう。詳しいことは分からないが4世紀末葉ごろのもので、22号墳の築造はその時期と推測される。これまで柄鏡形類型は南九州最古の前方後円墳とされたこともあったが、西都原古墳群の大正期の調査例を含めて検討したところ、4世紀後葉から5世紀初め頃までの約半世紀ほどの間に限定される墳形の可能性が高い。

以上のように、生目古墳群にある3基の大型前方後円墳は1号→3号→22号の順につくられ、1号墳が箸墓古墳、3号墳が渋谷向山古墳のそれぞれ1/2の相似墳、22号墳が南九州独特の柄鏡形類型墳を採用した。築造年代は今なお決定的な資料がなく流動的だが、1号墳を3世紀末前後、3号墳を4世紀後葉、22号墳を4世紀末前後と理解しておきたい。1号墳と3号墳の時間幅が大きく、そのあいだにもう一代の首長墳がつくられた可能性がある。墳長63mの中型前方後円墳の14号墳がその候補となるが、墳形は西殿塚古墳と行燈山古墳の中間型で、なぜ大型墳を築造しえなかったのか今後検討すべき課題の一つである。

このほかにも、前期につくられたと考えられる中型前方後円墳がある。22号墳に接する23号墳は、墳丘の変形が著しいが22号墳の1/2の相似墳であろう。5号墳は出土した土器から3号墳に近似した時期の築造と推測される。大型前方後円墳に近接して中型前方後円墳が同時期、ないしやや遅れてつくられた可能性が高く、階層構造的な構成をとることも注目しておくべきであろう。

それでは生目の3基の大型墳は、標題のように日向の王と認めてよいのであろうか。南九州の前期前方後円墳と首長墳系譜の動向に目を拡げて、この問題を考えてみたい。

4 大淀川と一ツ瀬川

南九州の前方後円墳分布の中心は宮崎平野にあり、約200基のうちの8割が集中する。とくに平野北部を形成する一ツ瀬川・小丸川流域と南部・大淀川流域、さらに最南端の志布志湾沿岸に集中の核があり、それぞれに100mをこえる大型前方後円墳が分布している。なかでも一ツ瀬川流域は、

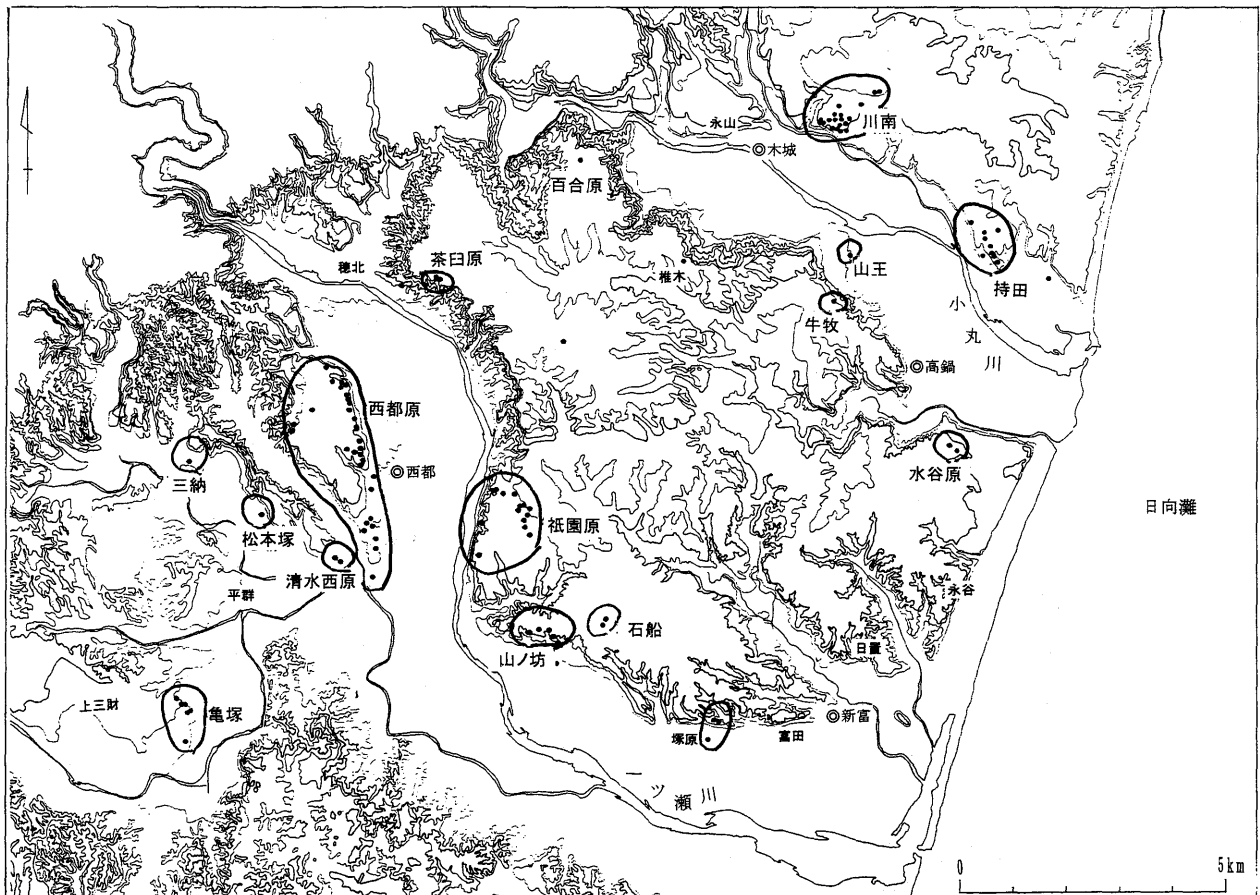


図8. 宮崎平野北部の主要古墳群と前方後円墳(黒丸は前方後円墳)

西都原と祇園原という2つの大型古墳群だけで50基近い前方後円墳がある。また、前期に限るとこの範囲内だけで17の首長墳系譜が集中している。

これまで南九州古墳時代の代表とされてきた西都原古墳群は、大正期の調査資料以外を除くと、ほとんど内容が分からないまま、さまざまに解釈されてきた。近年、80数年ぶりに調査が再開されたが、全体像が提示できるようになるのはまだ先のことであろう。けれども、先に示した前方後円墳の墳形分析を行うと、かなり具体的な古墳群の姿が見えてくる。

結論を先に述べると、32基の前方後円墳のうちの大半(約26基)は4～5世紀前葉につくられ、5世紀中葉～6世紀前葉までのあいだ前方後円墳の築造が中断している。そして4～5世紀の前方後円墳群は墓域を異にした大小7つの首長墳系譜が、西都原台地上に共存するきわめて特異な構成と理解できる。古墳の9割をしめる中小の古墳(円墳)は5世紀後葉以降の群集墳である。

もう少し具体的に述べると、台地上の前方後円墳分布は1基だけの場合(1例)もあるが、他の6例は3～6基程度がまとまって一グループを形成するしている。グループ内の前方後円墳を墳形区分すると、箸墓型、西殿塚型、行燈山型、さきみさきさきやま佐紀陵山型などの大王墳や巨大墳をモデルとした相似墳が多々認められ、おおよそ1世代ないし2世代位の間において連続的につくられていることが判明している。したがって、7つの前方後円墳のグループは、それぞれを独立した首長墳系譜と認めることができる。ただ墳丘規模や継続性などに違いがあり、墳丘規模が相対的に大きく継続性のあるA・B・Cの三グループが首長系譜のなかでも優位にあったと想定しうる。

西都原の7つの首長墳系譜は、4～5世紀初頭までの連続した前方後円墳の築造が認められるけれども、ついに墳長100mを上回る大型墳をつくることはなかった。ちなみに生目古墳群の大型前方後円墳と同時期の墳丘規模を比較すると、1号墳がつけられた時期で50m程度、3号墳の時期で80m程度、22号墳の時期で約100m、とくに1・3号墳の時期は規模格差が歴然としている。



図9. 西都原古墳群分布図(西都原台地上)

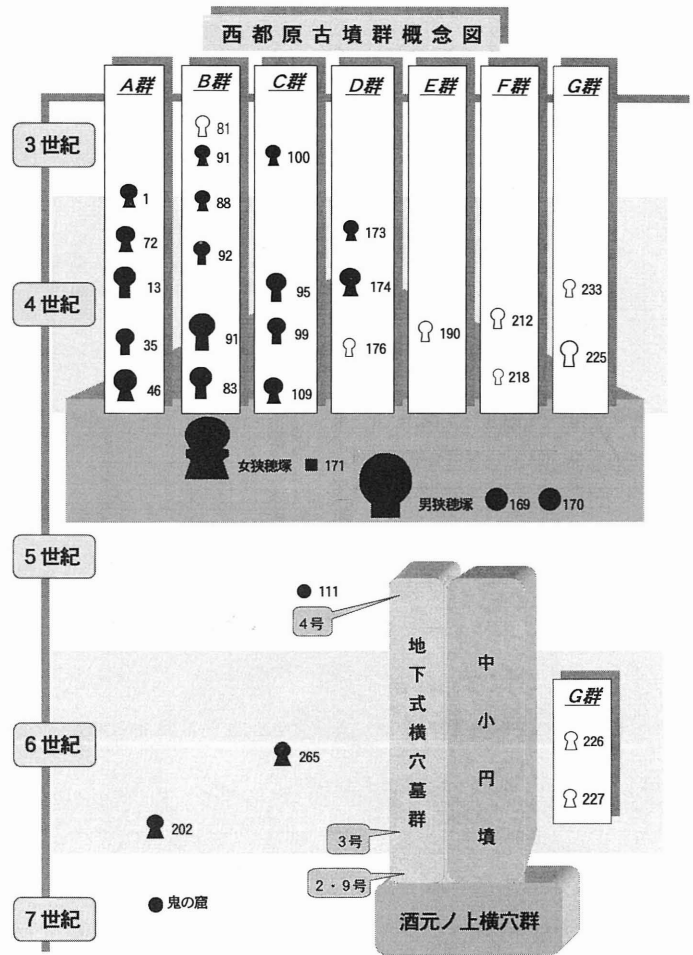


図10. 西都原古墳群形成過程概念図

一方、小丸川流域には川南・持田古墳群のふたつの古墳群があり、前期の大型古墳が知られている。なかでも川南11・39号墳、持田1号墳（計塚）は墳長110～120m前後の規模があり、生目の大型墳を理解する上で重要である。しかし、生目1・3号墳の段階では西都原とさほど変わらないが、柄鏡形類型段階で120m級の前方後円墳が登場する。持田1号墳は墳長120mを上回り、生目22号墳よりも一回り大型である。

以上のように、生目1・3号墳は他の首長墳系譜の前方後円墳との墳丘格差は圧倒的である。このことは、南九州に前方後円墳出現して半世紀あまりのあいだ、生目の首長を中心とした首長連合が形成され、生目の首長は南九州各地の首長の上にそびえ立つ盟主的な地位、言い換えれば日向という広域社会を統括した最初の王であったことを示している。しかし、柄鏡型類型の墳形が出現する4世紀後葉以降、勢力構図は微妙に変化する。

5 柄鏡形類型墳形の前方後円墳が語る社会

しばしば柄鏡形類型という墳形の前方後円墳に触れてきた。そしてこの墳形が出現した4世紀後葉以降、南九州の勢力構図の変化が始まったらしいとも述べた。

前方部が狭長で低い特徴をもつ柄鏡形類型の前方後円墳がどのような経緯で成立したのか、まだよく分かっていない。ただ先述したように、築造された半世紀のあいだ、少しずつ前方部が低くなる傾向は間違いないようである。そこで前方部が後円部の高さの1/2以上のものをa類、1/2のものをb類、それ以下をc類と区分すれば、22号墳はb類にあたり、この墳形の最古例は西都原13号墳（a類）、最新例は唐仁大塚（c類）となる。

この墳形の前方後円墳で重要な点は、4世紀後葉から5世紀初頭の南九州の前方後円墳のほとんどがこの墳形を採用したことにある。同時に、どの地域でも墳丘の大型化が顕著で、墳長80～100mの古墳が各地に認められる。なかでも小丸川流域は、生目22号墳と同規模の川南11・39号墳や、22号墳を上回る持田1号墳（計塚）などが出現する。

柄鏡形類型墳形以前、南九州の大型前方後円墳は大王墳の墳形を遵守してきた。しかし、大王墳にモデルを求めることができない柄鏡形類型が、南九州で広域で共有された背景は、首長連合が王権の墳形配布体制から抜けだし、独自の墳形で首長連合に参画する首長層の結束力を再構築する狙

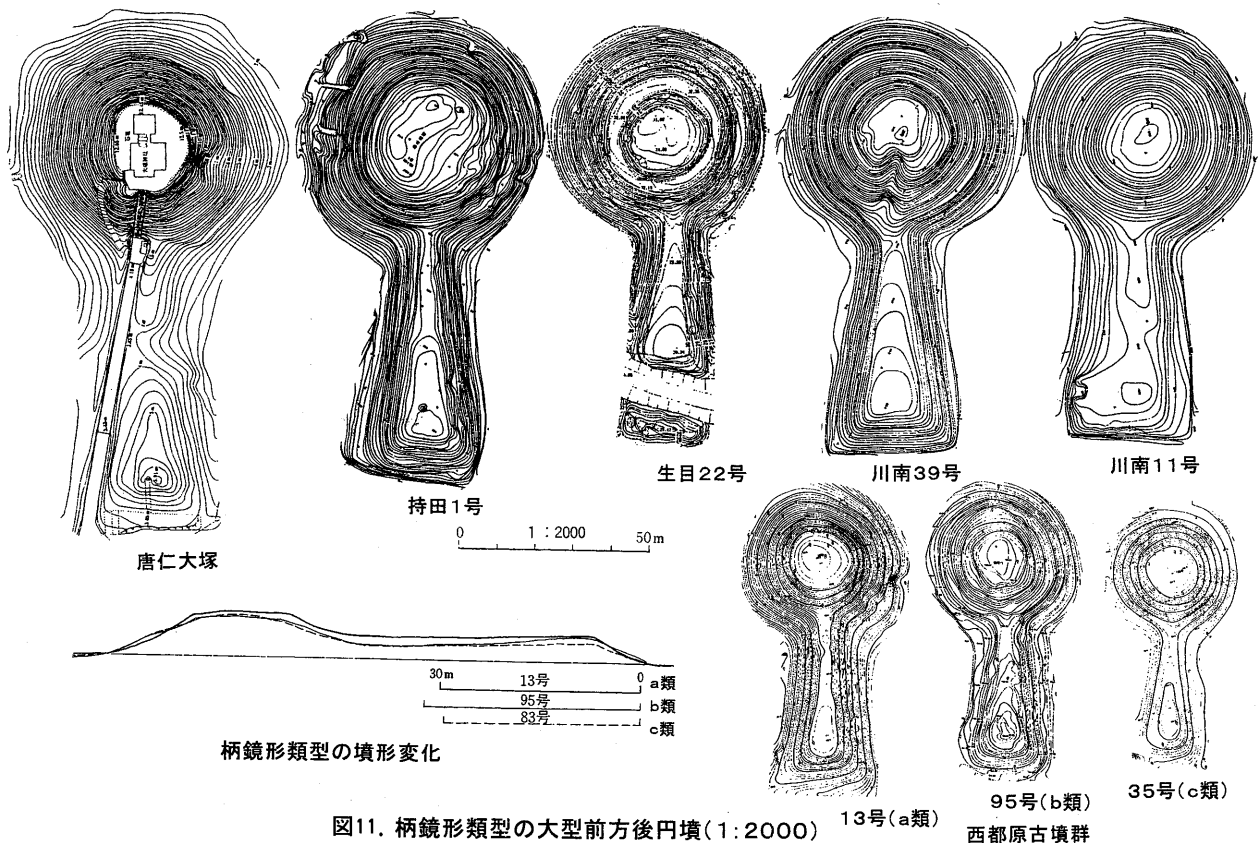


図11. 柄鏡形類型の大型前方後円墳(1:2000) 13号(a類) 95号(b類) 35号(c類) 西都原古墳群

いがあったのかもしれない。その結果、伝統的な生目首長の勢力が低下し、小丸川や一ツ瀬川など北部勢力の台頭をまねいた。4世紀代末頃はまだ南部・北部勢力は均衡しているが、5世紀に入ると志布志湾沿岸勢力を巻き込んだ大転換をみせる。

肝属川左岸に墳長約140m、柄鏡形類型墳形最後の大型前方後円墳・唐仁大塚古墳の登場である。古墳の築造年代に多少の不安が残るが、墳形や馬蹄形周堀の様相からみて柄鏡形c類型に属し、5世紀初頭から前葉のあいだに築造された可能性が高い。唐仁大塚は肝属川の対岸に営まれた前期の首長墳系譜の塚崎古墳群〔列島最南端の首長墳系列。前期初頭の箸墓類型墳から五社神類型墳まで4基の前方後円墳で構成される。最大規模の40号墳（約70m）は五社神類型の墳形を採用し、侮りがたい勢力に成長していた可能性が高い〕に後続する大首長墳である。

この古墳の竪穴式石室に納められた石棺は日向北部の勢力が製作に関与した可能性が高い。このことは、前段階の柄鏡形類型前方後円墳にみられるように、宮崎平野の諸勢力の確執は抜き差しならない状況に陥り、一時的に肝属川勢力に盟主権の移動が画されたと説明するほかない。

これまで、列島最南端に墳長140mの大古墳が出現する経緯に関する議論はまったくなかったが、一つの仮説として提示したい。なお大崎町にある墳長140mの横瀬大塚古墳も、日向首長連合盟主権の移動という視点から説明できることを付け加えておこう。この唐仁大塚古墳の築造直後、一ツ瀬川流域を基盤とする西都原勢力による激しい巻き返しがおこったのである。

6 女狭穂塚古墳の登場とその背景

5世紀前葉、西都原台地に築造された女狭穂塚は、墳長178m、周囲に2重の盾形周堀をめぐらし、河内平野（大阪府）に墓域を移した最初の大王墳・仲津山古墳（仲媛陵）の3/5の相似墳である。南九州で初めて円筒・形象埴輪を採用し、外堤上に陪冢の方墳を伴うなど大王墳の最新のスタイルを取り入れた。この被葬者は王権の強い後ろ盾を背景にして、新たな日向の王の地位に立ち、前段階までの墓制を革新する必要があったのではないか。大王墳の3/5という破格の規模はまさに相応しい。この時期に西都原の首長墳系譜のうちの大半が造墓活動を途絶える。女狭穂塚に埋葬された首長は、これらの首長系譜の統合を背景に登場したのである。

女狭穂塚の登場は南九州各地の首長墳系譜の内容を一変させた。

前代の盟主の座にあった生目古墳群は、22・23号墳ののち大型墳はおろか前方後円墳の築造は中断するらしい（小型の7号墳の築造年代が不明だが墳形からみると5世紀後葉以降か。あるいは5号墳同様に3号墳に近接する時期の可能性もある）。唐仁大塚ののちの唐仁古墳群や、小丸川流域の川南・持田古墳群の前方後円墳は著しく規模を縮小しているし、一ツ瀬川支流の三納川・三財川流域の首長墳系譜は断絶する。

一方、それまで顕著な前方後円墳がなかった一ツ瀬川左岸の茶臼原や祇園原に、女狭穂塚の墳形をモデルに多少の改変を加えた児屋根塚や大久保塚古墳などの大型前方後円墳が新たに出現する。このような南九州各地の首長墳系譜にみら

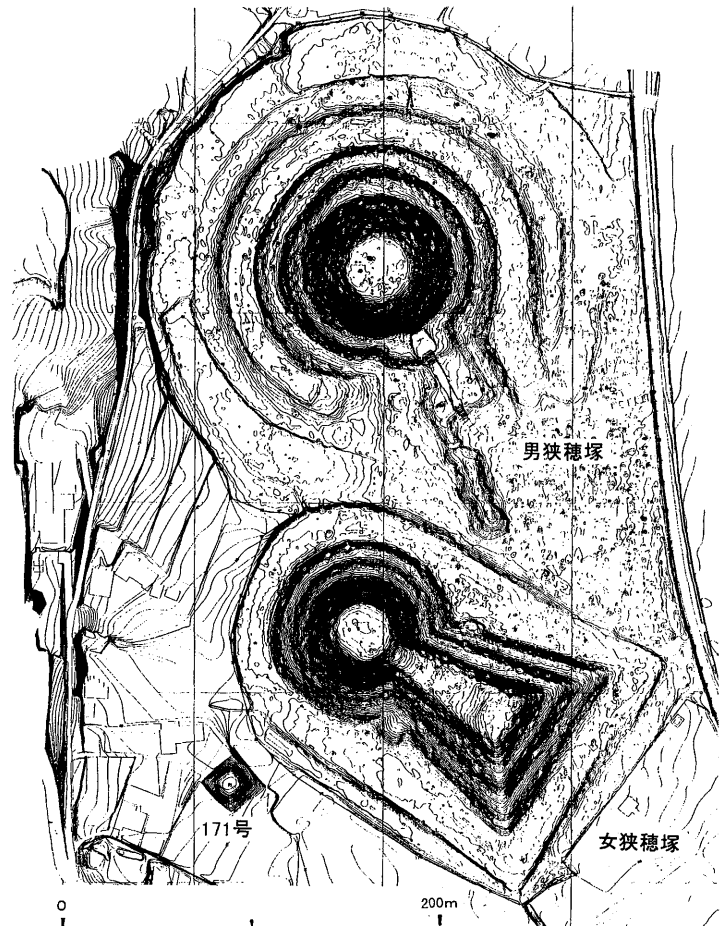


図12. 女狭穂塚と男狭穂塚古墳測量図

たに盟主の座についた西都原首長による首長連合の構造変革に連動した一連の動向、と説明できる。

7 4～5世紀の南九州と倭王権

3世紀末を前後して南九州に出現した前方後円墳と、各地に形成された首長墳系譜の消長過程を通じて、地域的な政治構造とその変貌をたどった。以上を通観すると、出現期の前方後円墳に箸墓類型墳、その後も継続して大王墳諸類型の墳形を継続的に採用した前期中葉までは、倭王権中枢との連携が顕著であった。

しかし、4世紀後葉に柄鏡形類型の墳形を創出し、日向・大隅の首長墳が一斉に共有する独自の墳形配布体制を形成した。王権から距離をおいた首長連合の変質ともいえるが、これは大王墳が大和東南部から大和北部への移動と連動した動向の可能性もある。ちなみに、大和北部（佐紀）古墳群では、五社神古墳ののち墳丘規模が200～210m代に縮小し、他の有力地域勢力（大和馬見・丹後・摂津など）の前方後円墳と墳丘格差がほとんどなくなる。さらに河内に移動した初期の津堂城山古墳もこの規格を踏襲し、墳長280m代に復するのは仲津山古墳の登場を待たねばならない。ちょうどこの時期は、柄鏡形類型の前方後円墳が盛行した期間とほぼ重なるのである。

5世紀前葉の女狭穂塚古墳の出現は、あたかも仲津山古墳の出現と軌を一にするあり方に改めて注目せざるをえない。上述したように、仲津山古墳は墳形と規模で王権の権威を再構築した観があるが、女狭穂塚古墳の登場も柄鏡形墳形体制を克服し、南九州における西都原勢力の覇権確立の宣言であったとみたい。

かつて女狭穂塚の出現を、大淀川・生目勢力から一ツ瀬川・西都原勢力による日向首長連合盟主権の篡奪と理解したことがあるが、以上のように、その間に柄鏡形墳形を象徴とする首長連合の時代を想定すべきであろう。先に、女狭穂塚について仲津山古墳との関係を指摘したが、この破格なまでの処遇は、王権が南九州の首長連合の動向にいかに関心を持っていたかをしめしている。

このようにみると、南九州の首長連合の消長は、内在的な首長間の動向に左右されながらも、王権の動向と決して無関係でなく、むしろ王権の変動と密接に連動していることが理解されよう。では、なぜ南九州にこれほどの大型前方後円墳がつくられたのか、今後に残された課題である。

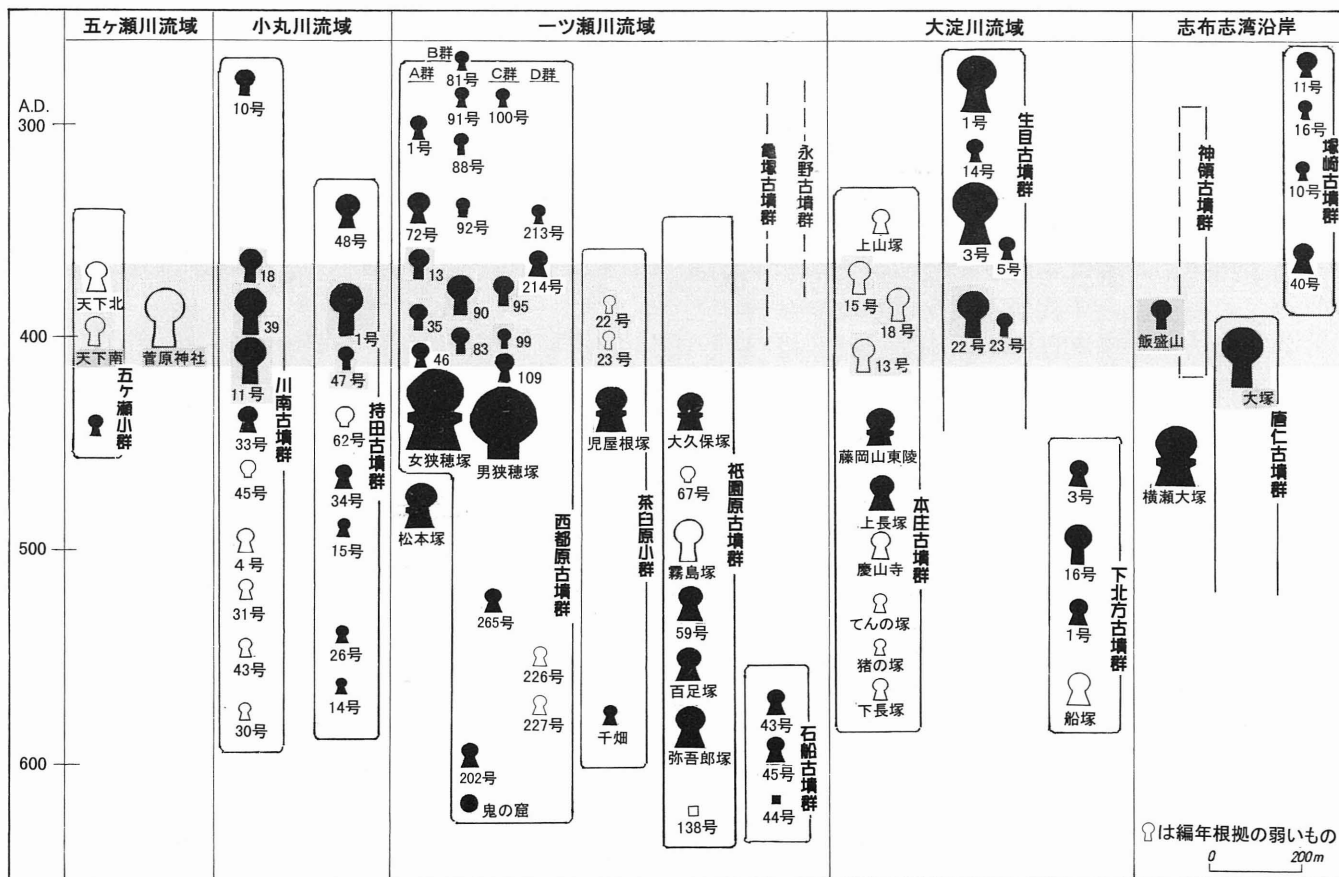


図13. 南九州主要首長墳系譜の編年（柳沢作成、1999. 10. 23現在）